ストップ戦争する国づくり！　憲法をいかし、くらし・雇用・平和を守ろう　2014.11.6 第22号

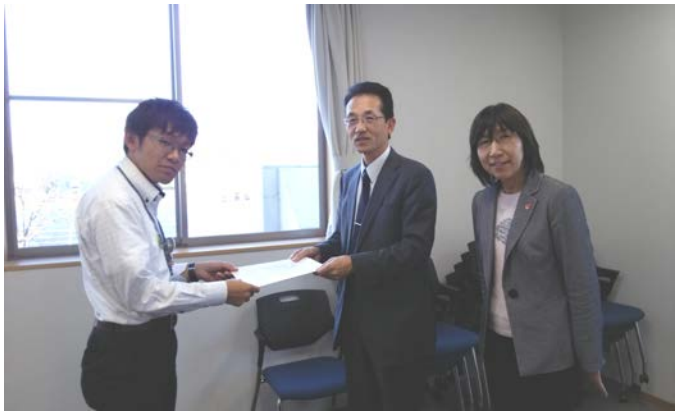
かがやけ憲法 キャラバンニュース

「原発はなくさなければならない」
一人ひとりのくらしの再建が「復興」

★福島・10月29～30日

福島県労連は10月29～30日、「かがやけ憲法！全労連全国キャラバン」福島行動を実施。29日には二本松市に避難している浪江町と懇談し、夜には全労連・長尾副議長を講師に「安倍政権と女性労働者」と題した学習会を開催しました。30 日には、福島市に避難している飯舘村と懇談し、昼休みには福島駅前の繁華街で宣伝行動を行いました。

浪江町と懇談　「無関心が恐い。状況を知り続けてほしい」



29日、福島県労連の斎藤議長、野木事務局長、全労連の長尾副議長ら4人が、浪江町役場二本松事務所を訪問。議会開会中であったため、総務課の小林直樹副主査が対応。「『戦争する国づくり』に強く反対し、憲法を全面的にいかして働く人々や地域が元気な日本をめざす要請書」(要請書)を手渡し、原発問題について懇談しました。

浪江町は現在、避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域と分かれています。小林副主査は、「人が住まない家の荒廃はひどく、雨漏りで家じゅうカビだらけ、家畜が入り込み糞だらけ。外見は被害がなさそうに見えても住めるような状況ではない」といいます。「平成29年3月を目途に、浪江で生活できるようにと、準備を進めています。コンビニがオープンしましたが、これは復旧作業に関わる人に温かい食べ物を提供しようというものであり、利益は上がっていません。4年ぶりに田植えも行われ、食べることはできなくても、復興の第一歩と考えています。農家の担い手が、美しい風景、それを受け継がなければとの思いで、行政とタッグを組んで実現したものです」と話しました。

復興計画には、町民も関わってきましたが、「町の復興と言ってもピンとこない」と言われたそうです。話し合いをする中で、「一人ひとりのくらしの再建=復興なのではないか」ということにたどりついと言います。「全国各地にいる避難者への支援も強めています。住民アンケートでは、4割が戻らないと回答していますが、故郷の再生は必要だと思っています。戻る、戻らない、の判断がつかないという人が3～4割おり、そういう方たちはずっと悩んで苦しんでいるのではないかと思います。浪江でくらしても、避難先でくらしてもいい、再建へのステップの『見える化』、制度の構築を示すことがきちんとできるかが問われています」と決意を話しました。

県労連からの「何か私たちにできることはありませんか」との問いかけに対し、「無関心になられるのが恐い。浪江がどういう状況であるのか知り続け、心を寄せていてほしい。そういうことを伝えてほしい」と訴えました。

飯舘村・副村長と懇談　家族、住民のきずなが大事

30 日、福島県労連の斎藤議長、野木事務局長、福島県国公の高橋事務局長、全労連の長尾副議長ら 5 人は、飯舘村役場飯野出張所の門馬伸市副村長を訪ね、県労連からの要請書と福島県国公からの「国家公務員の総人件費に関する基本方針などに関する要請書」を手渡し、懇談しました。

門馬副村長は、当時について「一週間程度、双葉町、南相馬からの避難民 1300 人を受け入れ、放射能が降る中、村民はマスクもせずに食事作りなど避難民の対応を行いました。国からも県からも避難の話はなかったです」と憤ります。「4 月 22 日に全村避難の指示が出され、1 カ月以内に避難せよとのことしでした。住民への説明、牛の村と言われる飯舘の 3500 頭の牛をどうするのか、学校のこと、仕事のこと、介護のこと、避難先も閉鎖したホテルを再開してもらって確保するなど、見つけるのが困難でした。全員が避難したのは、7 月 10 日でした」と苦労話が語られました。

除染については、当初、環境省の指導で行われたため、単独で行っていた自治体より遅れてしまったこと、今は 7200～7300 人の作業員が入っていますが、思うように進んでいないことなどの実態が話されました。仮設住宅に住むお年寄りが、ストレス、運動不足、食バランスの乱れなどで病気や認知症になるなど、医療費や介護給付が震災前の 1.5 倍になったとの辛い状況や村民のきずなが切れない様に、仮設住宅や避難地域ごとに自治組織を作っていることなどが話されました。

復興について、「農地は 5 センチ土をはぎ取り、入れ替える。土を肥やすには何年もかかります。インフラの整備、病院、学校の問題など復興の道のりは厳しいですが、戻ったときを想定した復興計画を策定しています。また、震災当初、企業が飯舘に残るように経営者と交渉し、6 企業が残り、若い人たち 350 人が避難先から通っているように雇用を守ってきました。他県で、また牛を育てはじめ頑張っている人もいます。一人ひとりに寄り添う、一緒に戻ろうということにはなりませんが、戻らない人は村民ではないということではありません。同じ村民としての施策が重要です」と述べました。

浪江町、飯舘村との懇談で、原発事故で故郷から避難し困難を抱えながらも奮闘されていることが伝わってきました。また、どちらの自治体からも「原発事故は、他の事故とは違う異質の困難をもたらす。それは住民の分断をうみだすことだ」と語りました。福島ではこんな状況が続いているのに、川内原発を再稼働させようとしています。「原発はなくさなければならない」これしかないのではないでしょうか。